

素心は、自立と幸福を追求する、70年の歴史がある組織です  
2023年10月、2年の月日を費やして、新しい理念が誕生しました

J I N C H I D O U K E T S U

# 仁 智 働 結

あらためて私たちの決意表明です

設立  
70周年に  
向けて

## 座談会開催しました

理念構築プロジェクトメンバー

今回、理念構築プロジェクトメンバーで座談会を行いました。  
リアルな職員のより成長し続けようとする想いをご覧ください。



仕事のやりがいをお聞きしました

(左から)

子ども達と一緒に楽しい時間を過ごすこと。  
幼児期から、育ちの過程に関わり、成長を実感する  
とき喜びとやりがいを感じる。 小幡 健斗 (35歳)  
放課後等デイサービス / 児童発達支援管理責任者

利用者との間に時間をかけて信頼関係が築くこと。  
そうした経験ができることにも幸せを感じる。 山口 健太 (35歳)  
地域支援センターそしん / 地域支援課課長  
(児童発達支援管理責任者)

仲間と一緒に働くこと。チームで共通の課題に  
取り組み達成できた時。利用者信頼関係が  
構築できたと感じた時。新たな視点を発見できた時。  
石森 健太郎 (49歳)  
素心学院 / 支援二課長

仕事の幅が広がって、制度・法律等社会の  
仕組みを学び、知識が増えるそれを組織に役立て  
ていくことが楽しさでもありやりがい。

笹森 俊平 (38歳)  
総務課長

利用者が気持ちや本音を話して下さるとき。  
利用者が目の前の目標に向かって  
一歩踏み出す瞬間に立ち会えた時。

小沢 佳那恵 (31歳)  
地域支援センターそしん / 相談支援リーダー

相談者の課題の解決に向けて前進したとき。  
そういう取り組み時に関係者の協力が得られた時。

大野 裕史 (44歳)  
地域支援センターそしん / 相談支援

利用者と一緒に楽しみ、喜びを共感している時  
仲間と共に困難な事例について取り組み改善に  
つながれたとき。それを喜び合う時。

小清水 俊平 (39歳)  
素心デイセンター / 支援課長

利用者とのかわりがなんといっても  
やりがい。新たな一面を発見したとき、  
明るい笑顔に出会えた時。

川崎 太一 (40歳)  
素心学院 / 支援一課長

日常の支援を職場の仲間と共に計画して、  
一歩一歩実現していくことがやりがい。  
利用者家族の笑顔を見るとき最高です。

瀬戸 洋平 (46歳)  
地域支援センターそしん / 相談支援

— 座談会に参加できなかったプロジェクトメンバーはこちら —



利用者を通して、社会が見えて  
きます。利用者・職員と共にいる  
現場の自分は、プライベートの  
時間より、笑顔です。

枇杷橋 卓也 (48歳)  
地域支援センターそしん / 生活介護サービス管理責任者



社会のありよう、制度・政策がどのよう  
に変わっても、当事者の方々が、前向きにい  
きっていくことができるよう、利用者・職員の相互  
理解と結束を大切にしていこうと思います。

高山 和宏 (56歳)  
地域支援センターそしん / 地域生活課長



20年以上従事する中で、利用者・保護者・  
職員の良好な関係が築けているからこそもつ  
開かれた組織にしたい、地域の方が気軽に  
立ち寄れる場所にしたいと思っています。

西垣 宏和 (43歳)  
地域支援センターそしん / 共同生活援助サービス管理責任者

理念構築の2年近く、皆さんと一緒に話し合いを続けてきましたが  
職種や入職からの期間に関わらず、素心会を大切に思っている気持ちが伝わってきました。  
「素心会」のどんなところが好きですか？



**瀬戸**：居心地がいいんですよ。いつも、自分のこと観てくれている感じがするんです。入職して20年になるんですけど、理事長はじめ、職場の仲間たちが、観ていてくれる安心感があります。観ていてくれるのは、利用者たちもなんですよ。上司も同僚も利用者みんなも、生活を共にするもの同士だからなんでしょうか。思い起こすと、いろいろなことをしてきました。遊ぶ・働く、暮らしのなかのいろいろです。そういう時、いつも互いを観ているからふとした時、想いを、隣の誰かにつぶやいたりすることができます。**想いを伝え合える関係がある…それが素心の居心地の良さなのかな**と思います。



SETO

**小清水**：入職して15年。毎日、いろいろな出来事連続です。時には、利用者との間に、穏やかな関係づくりができないときもあって、利用者だってもやもやすんでしょ、叩かれたり、つねられたりすることだってありました(笑) 良かれと思って、働きかけても、関心を持ってもらえず、悩んだり…課題を抱え、迷いながら、それでも、いろいろチャレンジし続けて今があります。



KOSHIMIZU

でも、思うんです。深く悩んだこと、苦労したことほとんどが、後で笑い話になるんです。あんなことあったね。こんなことあったね、だから、今があるね。为什么呢。いろいろな出来事が、次のモチベーションや発見に繋がっていたんだと思います。**利用者と職員が、関係を育てることを大切に働いてこられた素心会**。そういう法人だから好きなんだろうなと思います。

**石森**：前職は、大学卒業後、住宅の営業職をしていました。といっても、もう20年前。その後、職業訓練校で学びなおして、福祉分野の仕事に就くことになりました。神奈川県は、全国の中でも先進的な福祉をしていると言われており、その中でも、素心会を選らんだのは、海が近くて、自然が豊か。雰囲気の良い法人だったからです。デイセンターに15年。入所施設、素心学院に5年間勤務しています。**大磯・二宮の気持ちの良い自然と共にある、素心会のあり方は変わらない好きのひとつ**です。



ISHIMORI

**山口**：16年前、デザインの専門学校を卒業したのですが、その分野で仕事に就くことに迷いがあった、子どもが好きだったこともあり学童保育所で仕事を始めました。当時は、障害福祉の仕事しようという、強い想いはなかったのですが、素心会を知り、理事長に会って、20歳を過ぎて、仕事で目指す方向性が決まっていなかった自分に、「しっかりはたらいしてみよう」と言ってもらって入職を決めました。仕事を始めた当時、「障害」は、自分にとって、文字通り、生きるにあたっての障害であり「壁」だなあと感じていました。でも、働き続ける中で、多様な利用者に関わる中、「障害」「障害感」が変わってきました。壁とは感じなくなって、人間の「個性」と捉える方が近い感覚です。毎日を個性豊かに生きる利用者みんなが愛しく、利用者ひとり一人に寄り添い、彼らが、楽しい、嬉しいなど、喜びを感じて笑顔になるとき、最高にやりがいを感じます。「しっかり働いてみよう」と言ってくれた理事長に感謝しています。



YAMAGUCHI



TOPIC  
2

200名を超える素心の利用者さんは0歳から最高齢は90代。

職員の皆さんは、それぞれに利用者さんとの関係を築いていると思いますが、利用者さんやご家族のこと、聴かせてください。



**笹森**：一緒に旅行に行ったり、スポーツ大会やったり、お祭りに参加したり…利用者と共に、沢山の体験を重ねる中で、親しみだったり、信頼だったりが、いつの間にか育っていきます。素心は、全事業所を考えると赤ちゃんから、90代の高齢者まで、幅広い年代の利用者がいるのですが、自分と倍も年上の利用者さんから「笹森～」なんて、親しく声をかけてもらったり、ちょっとしたことで頼られたり、今は、総務を担当していて現場が少ないのですが、**個性あり魅力的な利用者が沢山いる素心会です。**

**川崎**：素心学院（入所施設）担当ですが、最近、ダウン症の高齢の方が入所したんです。他法人のグループホームで生活していたけど、加齢もあって、自立度が低下する中での、入所施設への移行です。彼にとっては、少し寂しいサービス移行だったかもしれません。ところが、彼の存在が、素心学院のメンバーたちに刺激を与えます。生活力があって、陽気で、漢字なんかも読めちゃう彼は、たちまち人気者になりました。70年の歴史ある素心会。素心で長く生活している利用者も多いのですが、**新たな仲間にもオープンマインド。面白がり、柔軟性がある利用者たちだと思います。**



**瀬戸**：通所事業の担当だから、送迎時など、ご家族と日常的に顔をあわせます。長く関わりを持っていると、利用者だけじゃなくて、ご家族のことも、表情でいろいろわかるようになります。重い障害を持つ家族がいることによる困りごとは、様々に起こっているのだと思います。家族で、解決したり乗り越えたりできる場合もあるけど、時々、「SOS」が発信されます。僕たちとしては、ほっておけないし、むしろ、そういう時に、頼って欲しいと思います。現在の素心会は、多機能になっています。通所の職員として頼られる関係になるだけでなく、**法人の機能を活用して、利用者のライフステージに沿った支援と同時に、ご家族を支えることについても、可能性が広がっています。**だからこそ、ご家族との信頼関係も、もっともって高めていきたいと思っています。

**小清水**：デイセンターにも、重い障害があって、長年通所している利用者・家族がいます。そういうご家族にとって、「困ったこと」って日常的で、いつものこと…になりがち。だけど、家では一歩も外に出られず、時には家族に対する他害行為だつて繰り返される。そんなことが続いたら、家族もつらいはず。僕たちは、そういう家族にもっと、頼ってもらえる僕たちになる必要があると思っています。瀬戸さんと同じ、素心が持つ、デイ、生活介護、就労支援B型、それに相談事業など、多機能事業と、**僕たち職員がつながり、家族との信頼関係を強くすることができたら、もっと支援力が高くなる**と思うんです。

**川崎**：家族と言えば、利用者の高齢化も進んでいるし、その家族の高齢化も。親亡き後のことを考えての入所施設の選択は、ニーズとしてあり、安心してもらえるように対応しようとしています。

**石森**：確かに、入所の選択は、高齢期を迎えようとしている人のなかに増えていると思う。でも、一方で、若い人もいます。30代と、50代、60代では、生活ニーズも違う。そこをしっかりとつかんで、ひとり一人にフォーカスした支援をしなくてはとも考えています。



**笹森**：そうですね。素心学院（入所）に来客があると、人好きで、好奇心旺盛な利用者たちは来客の人に集まっていく(笑) コロナもあって、外出や、外の人を施設に招いたりすることが減っている中、利用者達の日常生活に対する願いや期待にもっと応えたいと強く思っています。それには、入所も職員配置増員など、**よりニーズに応える体制づくりをしたり、地域生活拠点としての施設運営をより強化していく必要がある**と思う。前提として、入所の職員配置基準が、職員数が少ないので、いつも葛藤があるのですが、こんな風に、**法人をあげて職員みんなで対話を続け、新しい理念もできて、頑張っていこうと改めて**思います。



さて、皆さんは、次年度設立70周年を迎える社会福祉法人素心会の、これからの担っていくリーダー集団です。これまでの経験を活かし、障害福祉を一層、素心会らしく進めていくために新しい理念構築に向き合い、話し合いを続けてきました。今、新理念が誕生しました。これまで関わってきた感想やこれからの期待を聴かせてください。



**小清水**：新しい理念を考える経過では、具体例をみんなで持ち寄り、まったく新しい形式や文言を使うことについても十分話し合ってきました。一方、これまでの理念についても、もう一度、深く共有することもしました。そうした、いろいろな視点で意見交換を重ねてきた中で、「今までの理念が好きだな」「今までの理念の踏襲も考えよう」という意見がでて、皆で共感できたことは、僕にとって、とても嬉しいことでした。この話し合いで、これまで法人理念について日常仕事をしていくうえで、あまり意識していなかった自分に気づいたことは、とても良かったと思っていますし、これからは、**考え、語り合って生まれた理念を、皆に「伝えていける」と**思います。

**川崎**：目の前の利用者に対して、一生懸命仕事をしてきたけれど、法人理念について、日常的に意識してこなかった。でも、今回、理念を考える、また、新しい理念を、他の職員や利用者・家族地域社会にも伝えていく立場になって、改めて意識し始めたし、その大切さも実感した。素心会として、70年前の設立時と変わらない想いは持ちつつも、シンプルになったことで、共有しやすく、伝えやすくなったと思う。大事なことは、**理念にあることは、「当たり前のこと」「やっていかなければならないこと」。**スローガんに**終わらず、しっかり、受けとめ、伝え、実践したい**と思っています。



**瀬戸**：事業所が複数あって、物理的にも離れていると、なかなかじっくり話をする機会がなかったけれど、いろいろな意見交換ができて、すごく刺激を受けました。自分の仕事を振り返ることもできて、貴重な時間だったと思う。理念は完成したけれど、こういう時間を継続して持つことが大切だと思う。**新理念で、好きなところは、精神論的な…「こころ」を大切にしているところ。「仁」が大切だと自分は思っている。それに、夢、可能性という言葉が好き。**



**小幡**：ここまで他の職員の話をしつくり聴くことが少ないのが日常だから、本当に良い機会だった。今後、仕事をしていく中でも、「あんなこと言っていたな」と思い起こしながら、一緒に仕事をしていけるとし、もしかしたら、これまで違った発想がつながりの中で生まれることだってあるんじゃないかと思っている。本当に有意義な時間だった。



**山口**：みんなと話をし、理事長とも話をし、時間をかけて創ってきた理念。理念を生み出すには、みんなの気持ちを業務内容も含めながら話をしなければならず、だからこそ、この機会だから、こんな話ができたんだと思うことが沢山あった。その結果理念ができたと同時に、話し合いを重ねたからこそ、みんなの、**素心で働く職員としての意識や、素心を継続・発展させたいという想いを、実感・共有できたことは、次のステップを目指す仲間として、すごく力をもらった**と思います。



**大野**：相談という仕事柄、他の事業所と関わる機会が多く、理念なども知ることがある。よく、取り入れられている文言としては、安心安全の生活確保とか、権利擁護などをうたっているものをよく見かける。この理念構築メンバーになって、改めて理念ってなんだろうと考えた時、安心安全の暮らしや権利擁護は前提で、理念は、前提を抑えたうえで、どんなことを目指しているのか、どんなふるまいをするのか結集したものである必要があるなと思いました。僕は、**「仁智働結」4つの文字に、結集されている**と思っています。



**小澤**：私は、メンバーの中で一番入職してからの経験が浅いので、話し合いに参加して、法人のことメンバーの皆さんが考えていることがわかって、すごくありがたい時間になりました。理念の中に、どんな想いを、どんな言葉を取り入れたいか、という法人全職員アンケートも行ったのですが、そのアンケート結果を読み返すと、職員ひとりひとりが、どんなふうに、日常、利用者に向き合っているのか、仕事をしているのか、とても良かったです。新しい理念は、これまでの変わらない素心会の想いを継承するものにもなっているし、これから素心会に関わる誰もが前向きになれる理念になっていると思います。**「時代がどのように変わっても…」の一文、良いと思っています。**理念が整う場に立ちあえて、本当に良かったです。



**笹森**：2年がかりの作業。誕生した新理念は、職員の「決意表明」だと思う。ここにくるまで、紆余曲折あり、あたりまえだけど、一人では決して創れなかったと思います。自分は、現在は、現場を離れて総務課で仕事をしていて、日々、数字を追う業務内容になっているところ、この話し合いに入ってから、改めて、「福祉」って何?から、考える機会になったと思う。そして、現場職員のみなが日々直面している課題や、想いについても聴いて、理念って、そうしたことがあることを承知しているからこそ、でも、自分たちはこんなことを大切にしている、きつと実行していくという、**「素心イムズ」のようなことを「決意表明」することなんだ**と思った。皆の決意を**設立70年を前に、言語化できたことは、貴重な経験だった**と思っています。





TOPIC

4

最後に、

皆さんのこれから素心でやっていきたいこと、  
聴かせてください。

**小清水：** 理念づくりをする過程でも、「地域とのつながり」をより創っていくことを度々話合ってきましたが、大磯の横溝記念障害福祉センターに素心のパンをはじめ、地域の事業所とのコラボショップを開設する話を進めています。素心を知ってもらうための情報発信の場として発展させていきたいです。



**石森：** 今、思うことは、法人内の人材育成にチカラを入れていくこと。素心会は、既にいろいろな業務に取り組んでいるから、業務を行うための研修が多くなる傾向があるけれど、社会や地域を知り、素心会が何をすべきなのか、主体的に職員として歩みを進めていくための人間教育的なことをもっと行う必要があると思う。素心の良さは、利用者と共にいて、「利用者は面白いよ」と言えるところだと思う。



**小幡：** 放課後等デイサービスの担当をしています。放デイには、二宮・大顔・平塚の3市町、全11校の小中学校の子ども達がサービス利用しています。放デイ職員として、つながりができてきたのは、これらの学校の個別支援級の先生。子どもに関する情報共有をしつつ、子ども達にとって、家でも、学校でもない、第三の居場所が必要なることを共感して、放デイとつながってくれていて、こういうつながりをこれからも大事にしたいと思っています。居場所として、子ども達にとっての価値は、様々で、友達と遊ぶことはもちろん、家や学校で会えない人に会ったり、体験したり、いろいろ。いろいろを行っていくためにも、法人内、または、地域とのネットワークをもっと広げていく必要があります。放課後の時間って、思った以上に長い時間で、この時間で子ども達との信頼関係は、放課後等デイサービスの利用後も、素心とのつながりは継続して、素心会の様々な事業で、ずっと、見守り、一緒に歩んでいけるような素心になりたいと思います。

**小澤：** 相談支援としては、他の事業部の皆さんに協力を仰ぐことも多いのですが、相談員ひとり一人のケースは複雑なものも多くて、誰かに相談できないまま、個人で抱え込んでしまうこともあるんです。でも、対話すること、つながること、協力しあうことは大事だと改めて思っています。私自身、それを実践できるよう、まずは、素心会内部が、相談しあえるチームになるよう働きかけていきたいと思っています。



**山口：** 僕は、芸術活動に関心があって、利用者の作品展、平塚美術館で行われる「心創展」にも利用者の制作活動に携わりつつ、作品を出典しています。利用者のなかには、制作活動がとても好きな人がいて、一生懸命取り組んでいます。レベルの高い作品を製作することができる人もいます。今、ノベルティや卓上カレンダーなどの政策にも取り組んでいて、これからは、展覧会への出展のみを発信の場にするのではなく、インターネットの活用などして、作品を観てもらったり、レンタル・販売など、チャレンジしたいと思っています。素心の事業所間の連携・協働がより進めば、製品開発なども、もっともって、考えられるかも。デイセンターのパンを販売する際のパッケージデザインとか、壁掛け式の絵を製作する等いろいろ考えています。



**川崎：** 入所施設である素心学院では、生活空間の改善を、少し前から職員で話合っていたのですが、なかなか手が付けられないでいました。でも、是非、皆でチカラを併せてやっていこうと思います。居室だけではなく、エントランスや共有のスペースの活用など、施設全体を見直して魅力的な空間にしていきたいと思っています。そのためには、他の法人の試みや、専門家の意見を聴くなど、色々な情報収集をして、実行しようと思っています。

**笹森：** 総務課としては、記録のICT化を進めたいと思っています。社会福祉法人の職員に求められていることが増えているなか、ICT化によって、業務の効率化を図って、少しでも職員が利用者と一緒に居られる時間を増やしていきたいと思っています。



**瀬戸：** 生活介護のなかでも、園芸や陶芸を行っている。陶芸は窯もあるけれど、もっと活用できる。今回、このプロジェクトで話合ってきて、お互いの事業部の状況もわかってきた今が、つながりをもっと具体的な取り組みに活かすチャンスが来たと思っている。いろいろできそう！

